

垂仁天皇 菅原伏見東陵採集の埴輪について

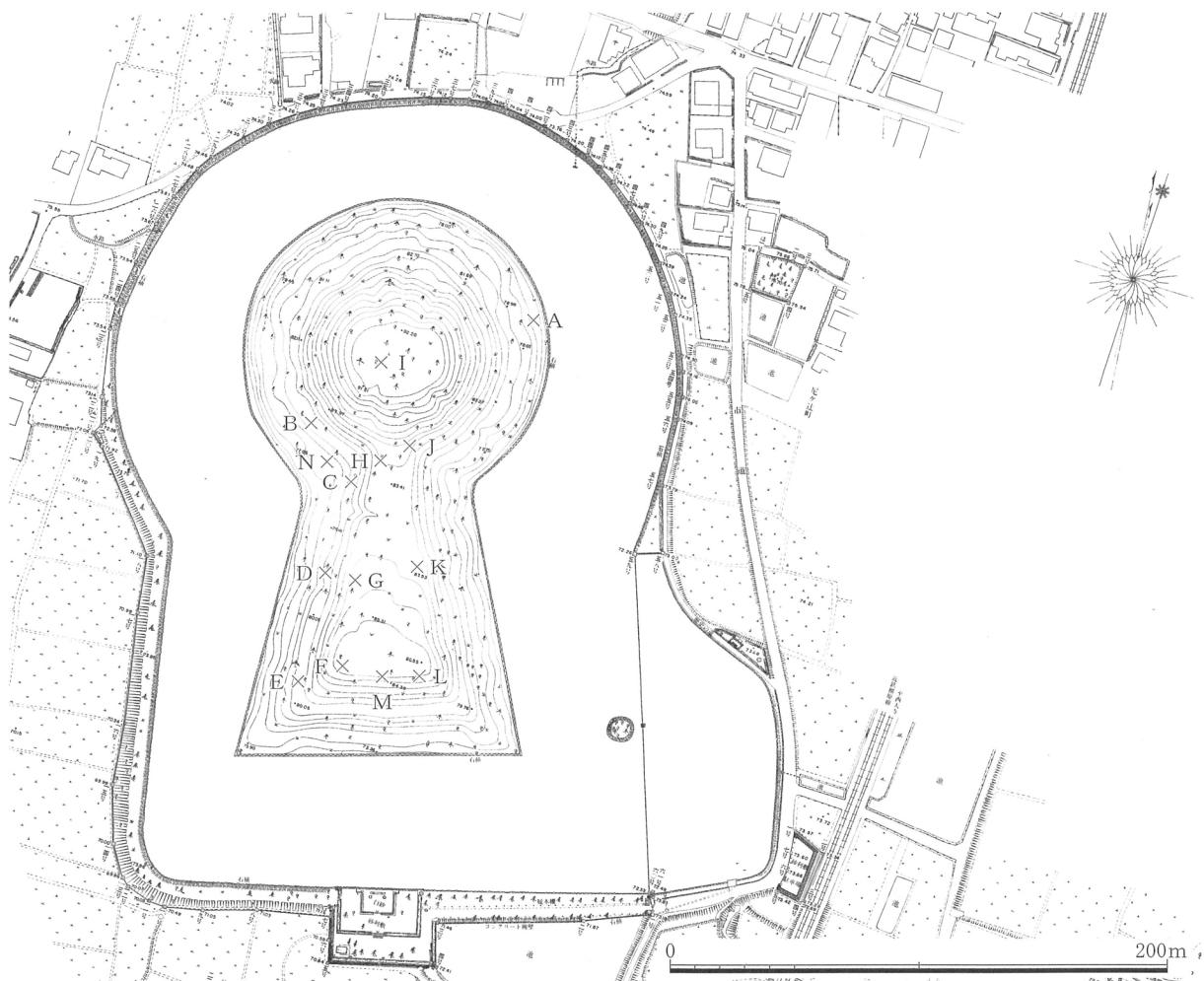
加藤一郎

はじめに

奈良市尼辻西町に所在する垂仁天皇菅原伏見東陵は、現状での墳長が約230mの前方後円墳である。遺跡としての名称は宝来山古墳であり、その墳丘は三段築成で築造当初は周囲に鍵穴形の周濠をそなえていたと考えられる。

これまで当陵からの出土品はあまり知られておらず⁽¹⁾、現地を訪れても遺物を採集できるようなことはほとんどなかった。しかし、平成23（2011）年の秋に郡山陵墓参考地において事前調査中であった筆者に畠傍陵墓監区事務所の職員から連絡があり、陵墓管理委員の現地視察にそなえて巡回路の落葉を送風機で除去していたところ遺物が多数確認されたので対処してほしいということであった。そのため折をみて筆者が現地に赴き、出土地点を確認しつつ露出した遺物の採集をおこなった。

以下では、その際に採集した遺物を紹介するとともに、これまで存在は知られていたものの未図化であった遺物についてもあわせて紹介することにしたい。



第1図 菅原伏見東陵 採集箇所位置図 (1/3,000)



写真1 採集箇所Mからみた後円部方向の状況



写真2 採集箇所M(写真奥が西)



写真3 採集箇所M (1)



写真4 採集箇所M (2)

1 採集遺物について

今回採集した遺物は総計 869 点であるが、そのほぼ全てが埴輪片である。採集位置は第 1 図に示したように A～N の 14 箇所にのぼる。図化した各破片の採集位置については、実測図における個体番号脇の括弧内に記してあるので参考願いたい。

(1) 墓輪 (第 2 ~ 7 図)

まず、各破片の説明をおこなう前に今回当陵において採集された埴輪の傾向について述べておきたい。埴輪の焼成については、堅緻な仕上がりのものがみられず、黒斑をもつ資料がみられることからすべて野焼きによるもの判断される。色調は、黄橙色～黄白色となるものが大半であり、基本的には外面に赤色顔料が塗布されていたものと思われる。胎土には基本的に直径 3 mm 以内の砂粒（石英、花崗岩片、金雲母、赤色粒など）が含まれる。破片資料が大半であるためその多寡が形状の差異などと関連するのかは不明である。なお、金雲母が特徴的に目立つ破片も存在する。

埴輪の器種としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、鞍形埴輪を確認している。

円筒埴輪・朝顔形埴輪 1 ~ 36 は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪と考えられる破片である。

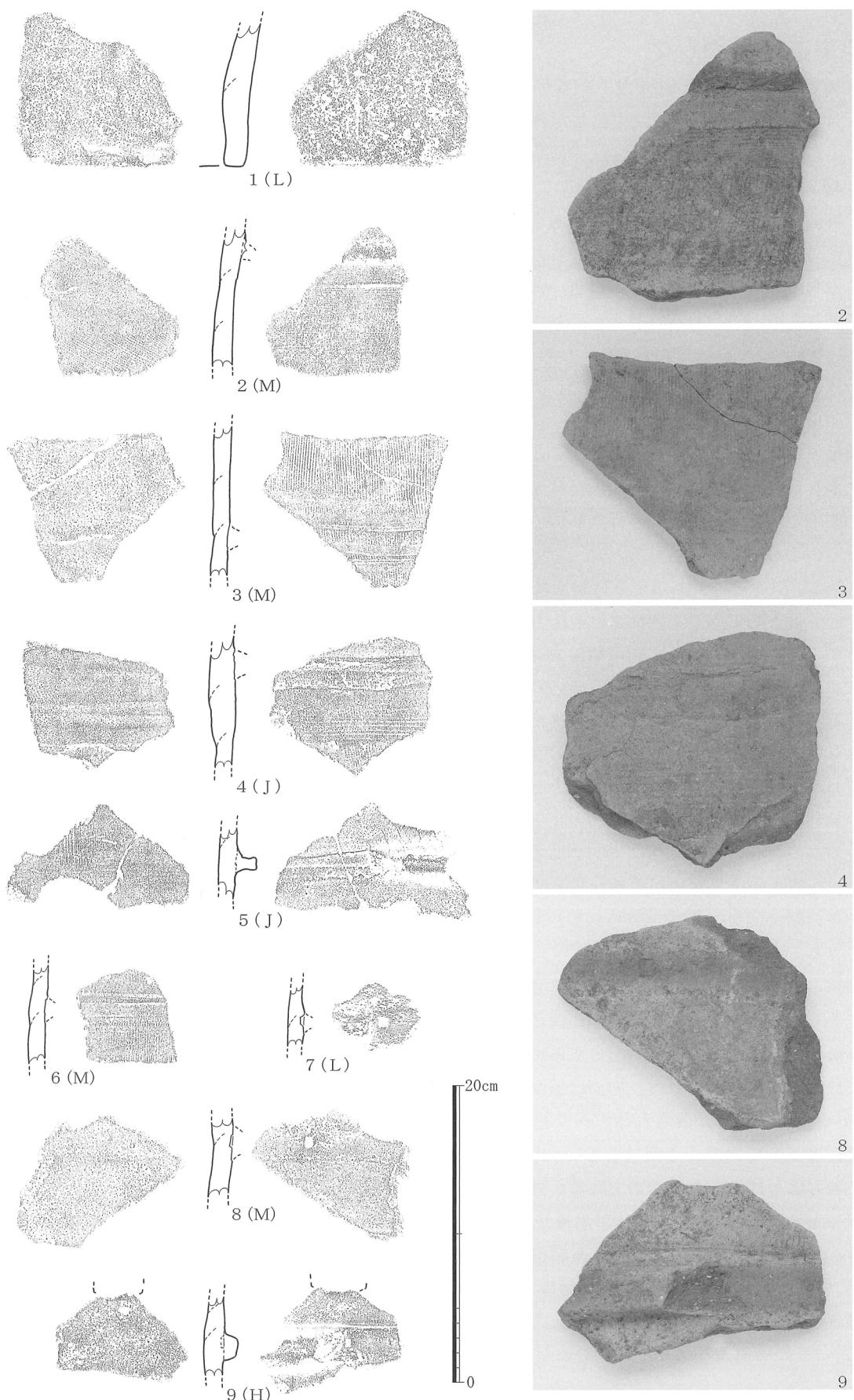
1 は底部を含む破片である。外面調整は摩滅しているため不明であるが、内面では指ナデや指頭痕が確認できる。底部を含む破片は今回の採集品中では少量であり、埴輪はその大半が盛土中に設置されたままの状況を保っているものと推測される。

2 ~ 15 は胴部の破片である。2 は外面にタテハケの後にヨコハケがほどこされているが、ヨコハケの静止痕については不明である。内面には左上方向のハケがほどこされているが、接合痕付近ではその後に横方向のナデがほどこされている。突帯貼付に対応するヨコナデかどうかは不明である。3 の外面調整はタテハケのみである。突帯が剥離しており、その剥離箇所では突帯設定にかかわる凹線⁽²⁾がみられる。内面調整はナデである。4 の外面調整はタテハケの後にヨコハケがほどこされているが、ヨコハケの静止痕については確認できない。突帯が剥離しており、その剥離箇所では凹線がみられる。内面調整は左上方向のハケの後に明瞭なヨコナデがほどこされており、ハケはほとんど確認できない。内面の下部には接合痕がみられるが、下からの調整（ハケか？）が接合痕の中に入していく様子が観察できるのでこれが積み上げ休止単位⁽³⁾である可能性が高い。5 の外面調整は不明である。突帯の剥離箇所では凹線がみられるとともに、突帯の上辺では L 字痕⁽⁴⁾も確認できる。内面調整は基本的にナデであるが、タテハケが一部に残っている。ヨコナデについては突帯の貼付に対応するナデであると思われる。6 の外面調整はタテハケで、突帯の剥離箇所では凹線が確認できる。内面調整はナデである。

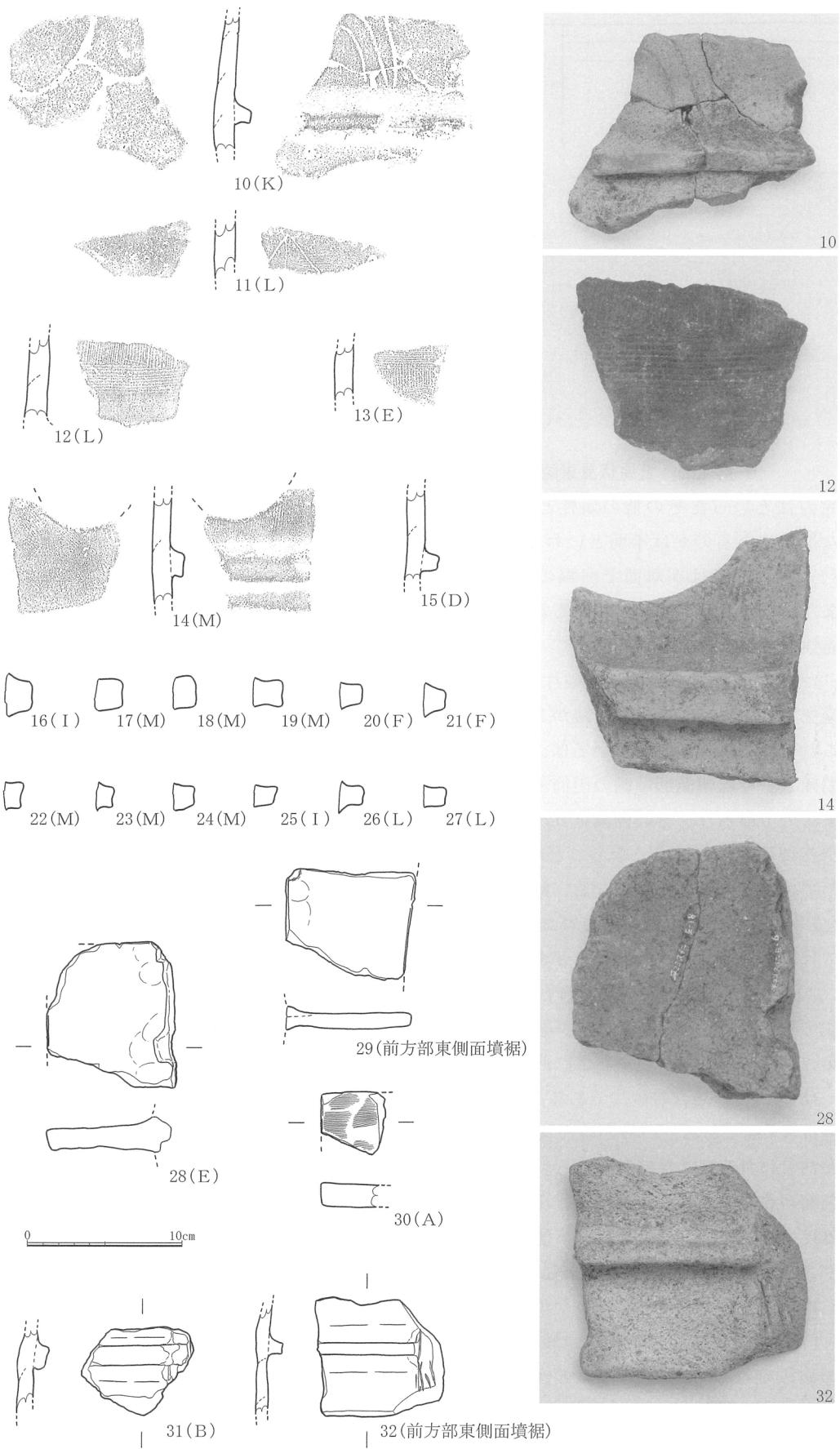
7 は突帯の剥離箇所で方形刺突⁽⁵⁾を確認できる。8 の外面調整はナデのようにもみえるが赤色顔料塗布時の痕跡である可能性もある。突帯の剥離箇所では方形刺突がみられる。内面調整はナデである。9 は透孔をともなう破片で、透孔の形状は方形である可能性がある。外面調整は一部にタテハケを確認でき、突帯の剥離箇所では方形刺突がみられる。内面は器壁が摩滅しており、調整の観察は困難である。

10 は外面にヘラ記号がみられる。ヘラ記号の線刻の凹部には赤色顔料が残存している。内外面ともに調整は器壁が摩滅しており、不明である。11 は外面に矢印状のヘラ記号がみられる。この形状のヘラ記号は他古墳でもしばしばみられるものである。外面調整はタテハケの後にヨコハケがほどこされている。内面調整はナデである。12 は外面の全体に黒斑がみられる。外面調整はタテハケの後にヨコハケで、内面調整はタテハケの後にナデである。13 の外面調整はタテハケの後にヨコハケで、内面調整はナデである。11 ~ 13 ともに外面調整のヨコハケの静止痕は確認できない。14 は円形もしくは半円形の透孔を含む破片で、外面調整はタテハケである。内面調整は左上方向のハケで、突帯に対応する部分では横方向のナデがその後にみられる。15 の外面調整は左上方向のハケである。突帯の上辺には L 字痕がみられる。内面調整はナデである。

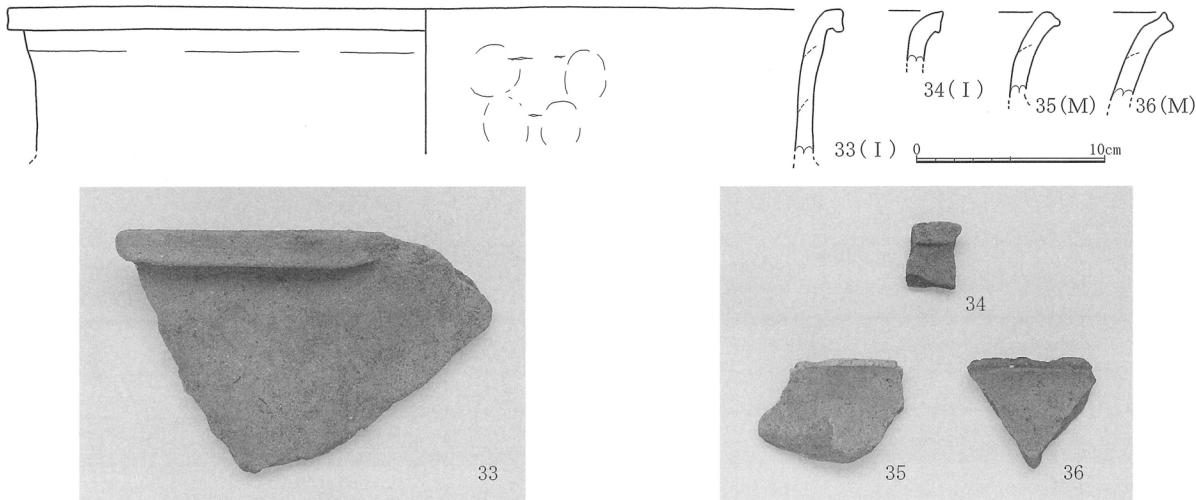
16 ~ 27 は剥離した突帯の破片である。その断面形状は多彩であるが、破片資料のため外面調整方法や



第2図 菅原伏見東陵 採集品実測図 (1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 底部・胴部 (1/4)



第3図 菅原伏見東陵 採集品実測図(2) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 胴部・鰭部(1/4)



第4図 菅原伏見東陵 採集品実測図（3） 円筒埴輪 口縁部（1/4）

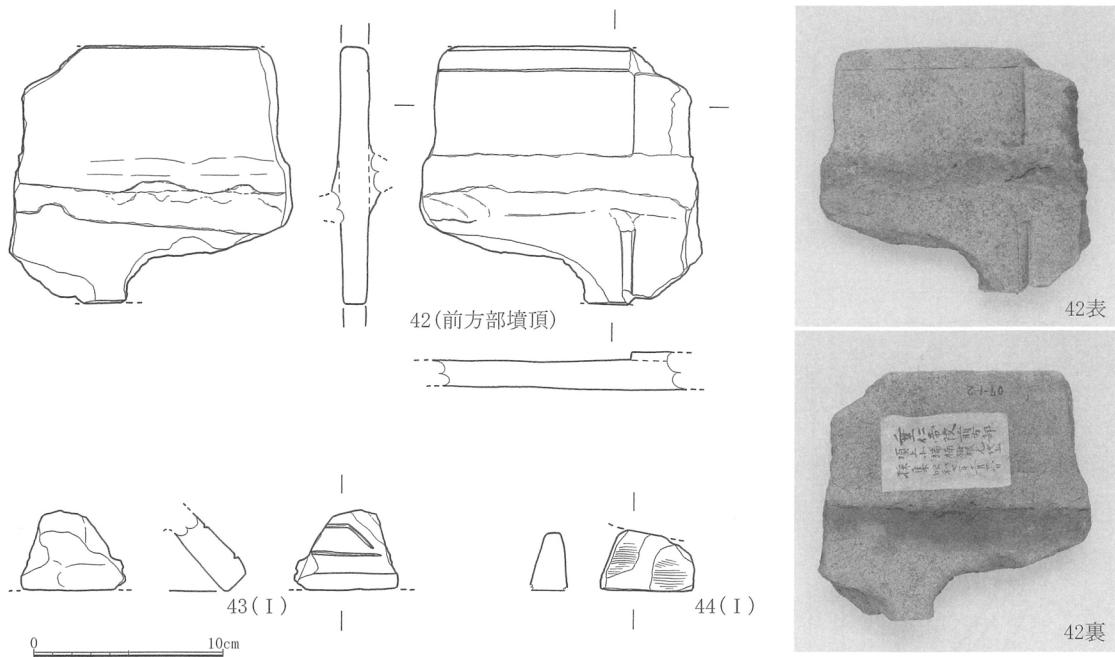
突帯設定方法といったその他の属性と突帯形状がどのような関係にあるのかは不明といわざるをえない。16、17、24、25では剥離面で凹線の痕跡が確認できる。また、18、20、22についても剥離面で凹線となる可能性のある痕跡がみられる。

28～32は鰐やその痕跡を含む破片である。28は鰐の上端を含む破片で、突帯の痕跡が2箇所で確認できる。これらの突帯の痕跡については、円筒埴輪の口縁部の間隔もしくは朝顔形埴輪の円筒部の最上段の間隔を示すものであろう。その間隔は6cmであり、あきらかに突帯間隔よりも小さくなることが確実で、当陵の円筒埴輪に口縁部が突帯間隔よりも短くなるものが存在していたことがわかる。なお、鰐の接合にあたっては突帯を切り取って接合していたことがわかる。29は平成15（2003）年に採集されたものである。図の左上では突帯の痕跡が確認できる。この破片の特徴としては、器壁が非常に薄いことがあげられる。30は鰐の破片としたが、形象埴輪の一部である可能性もある。31、32は鰐の剥離箇所を含む破片である。いずれも鰐の接合に際して突帯が切り取られていることが確認できる。なお、32では鰐の剥離箇所で細かい刻み目がみられる。32は29と同様に平成15（2003）年に採集されたもので、器壁が非常に薄い点も特徴的である。

33～36は口縁部を含む破片である。33は今回採集した破片の中で唯一、直径を復元できた資料であり、その口径は44cmである。口縁部の形状はほぼ直立し、端部を急激に屈曲させている。破片の下部ではじきに突帯があらわれそうな雰囲気がある。外面調整はナデであるのか摩滅しているのか判断がつかない。外面には赤色顔料がみられる。内面調整はナデである。34も33と同様の口縁部形状である。35の口縁部形状は若干外反するものである。破片の下部ではじきに突帯があらわれそうな雰囲気がある。内面には左上方向のハケがみられる。36の口縁部形状は35と同様に若干外反するものの、口縁端部が少しつまみあげられている。内外面ともに左上方向のハケがみられる。

37～41は朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪となる破片である。37、38は口縁部の破片で、39～41は頸部付近の破片である。39、40では頸部に突帯がみられるが、41では頸部に突帯は貼付されなかったようである。

形象埴輪 形象埴輪としては家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、鞍形埴輪を確認している。採集位置は後円部墳頂のI地点のものが多いが、前方部墳頂などでも一定量が採集されている。



第6図 菅原伏見東陵 採集品実測図(5) 家形埴輪(1/4)

42～44は家形埴輪の破片である。42は当部が発行した出土品展示目録の『埴輪IV』(28)に掲載されている資料である。家形埴輪とされているが若干不審な点があるので、以下に記しておく。まず、内外面とともに横方向の欠損部分がみられる点があげられる。外面については裾廻突帯などの可能性が考えられるが、内面についてはあまり例がないものの、二階建て構造の家で二階の床を表現したものといえなくもない。また、窓の表現と考えられる一階、二階それぞれの透孔が、柱を表現したと考えられる縦方向に貼付された粘土帯の直近にまでせまっていることもあまり家形埴輪にはみられない点である。この透孔については直角に屈曲する雰囲気が現状ではみてとれないで、柱を切除している可能性も考えられる。そうであるとすれば家形埴輪としては異例となってしまう。なお、この破片は貼られているラベルからも明らかのように、昭和7(1932)年に前方部墳頂において採集されたものである。43は家形埴輪の裾廻突帯と考えられる。直弧文風の線刻がほどこされているのが特徴である。44は鰐飾りの破片と考えられる。図の下部が剥離面となっているので家形埴輪の棟部分などに貼付されたものと考えたが、その他の形象埴輪に付属したものである可能性もある。

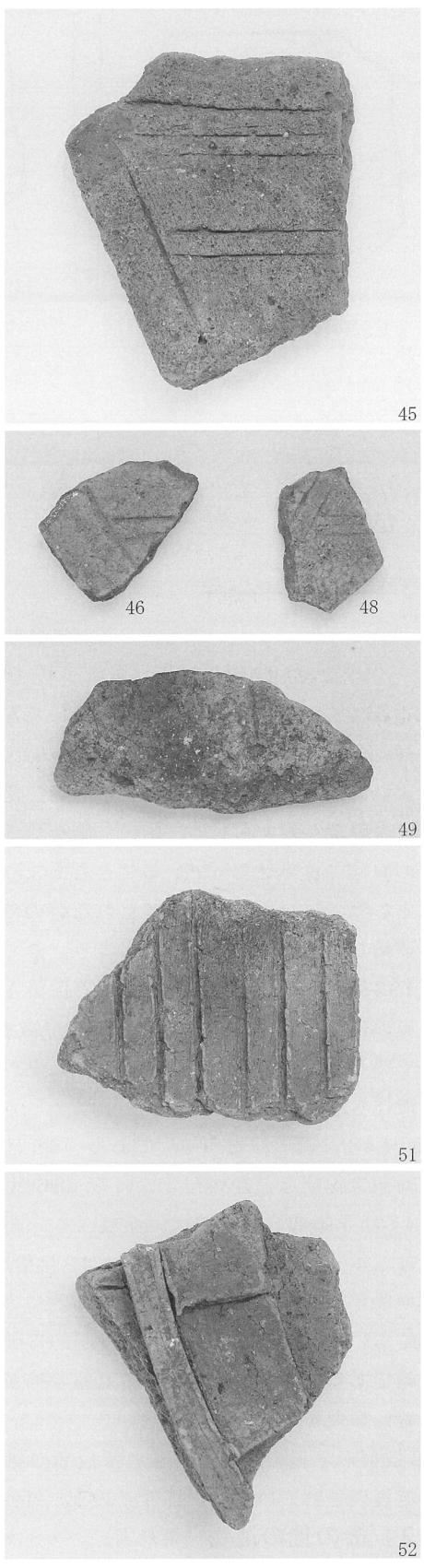
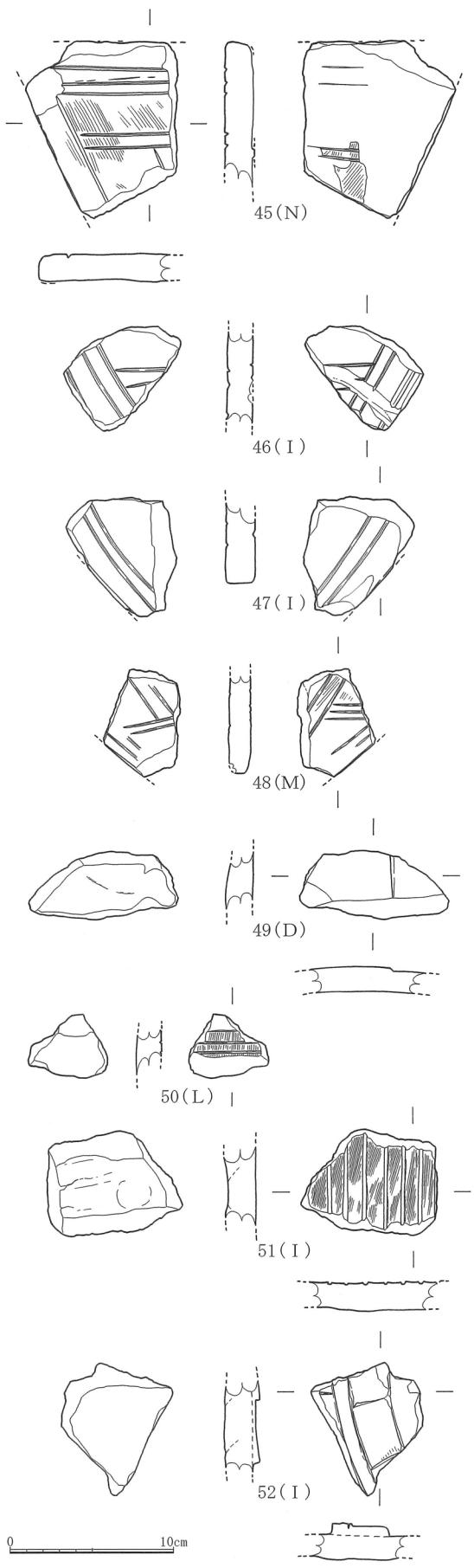
45～48は蓋形埴輪の破片である。45は立飾部の上端の一部である。片面は剥離が進行しているが、その反対面は線刻などが残存している。46は立飾部の破片で、両面で三本一組と考えられる線刻が確認できる。47は立飾部の破片で、両面で二本一組の線刻がみられる。48は立飾部の破片で、両面で二本一組もしくは三本一組の線刻がみられる。49は笠部となる可能性のある破片である。笠部の破片であるとすれば、笠部の段差表現が線刻ではなく、立体的に表現されている点が注目される。

50、51は盾形埴輪となる可能性がある破片である。いずれも直線が平行に等間隔で充填されており、盾形埴輪であるとすれば伊豫親王墓(京都府黄金塚2号墳)や奈良県不退寺裏山古墳などで確認されている盾形埴輪に類似するものになろう。

52は鞍形埴輪の破片である。背板部の肩かけ紐もしくは渦巻文部分の破片であり⁽⁶⁾、線刻ではなく有段突帯で表現されているのが特徴である。外面には赤色顔料が残存している。

(2) その他の遺物(第8図)

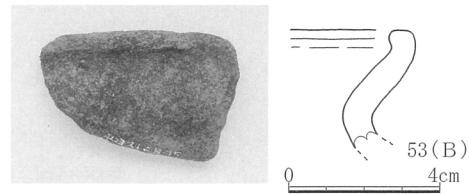
53は土師器の破片である。布留式の甕の口縁部のようにもみえるが、鉢や壺のような形状となる可能性もある。口縁部の長さが短い点が気にはなるが、布留甕であるとすれば口縁端部の形状から判断して布留1式新相～2式古相に帰属するものと思われる⁽⁷⁾。採集位置は西側くびれ部の第2段テラス上であるB地点で



第7図 菅原伏見東陵 採集品実測図(6)
蓋形埴輪・盾形埴輪・鞍形埴輪(1/4)

あるが、盛土中に含まれていたのか墳丘築造時にともなうものなのには不明である。

また、遺物ではないが後円部墳頂のI地点において直径4cm程度の白色の円礫を採集している。



第8図 菅原伏見東陵 採集品実測図(7)
土師器(1/2)

2 採集埴輪の位置づけ

(1) 採集埴輪の特徴

上でみてきたように、採集遺物のほとんどが埴輪であるが、いずれも断片的な資料で全形がうかがえるようなものは存在しない。しかし、破片資料とはいえ時期などを考える上での手がかりとなる特徴が観察できたので以下にまとめておきたい。

円筒埴輪

- ・焼成方法は野焼きである。
- ・口径が44cmに復元できる大型のものが存在する。
- ・突帯設定の方法として四線と方形刺突の二つが確認できる。
- ・外面調整はタテハケのみのものとその後にヨコハケ（静止痕は不明）がほどこされるものがある。
- ・口縁部が突帯間隔よりも短いものが存在する。
- ・透孔の形状は確定できないが、円形、半円形、方形となる可能性のものが存在する。
- ・鰐をもつものが存在する。

形象埴輪

- ・蓋形埴輪の笠部に立体的な段差表現をもつ可能性のあるものが存在する。
- ・「黄金塚タイプ」⁽⁸⁾の盾形埴輪となる可能性のあるものが存在する。
- ・鞍形埴輪が存在する。

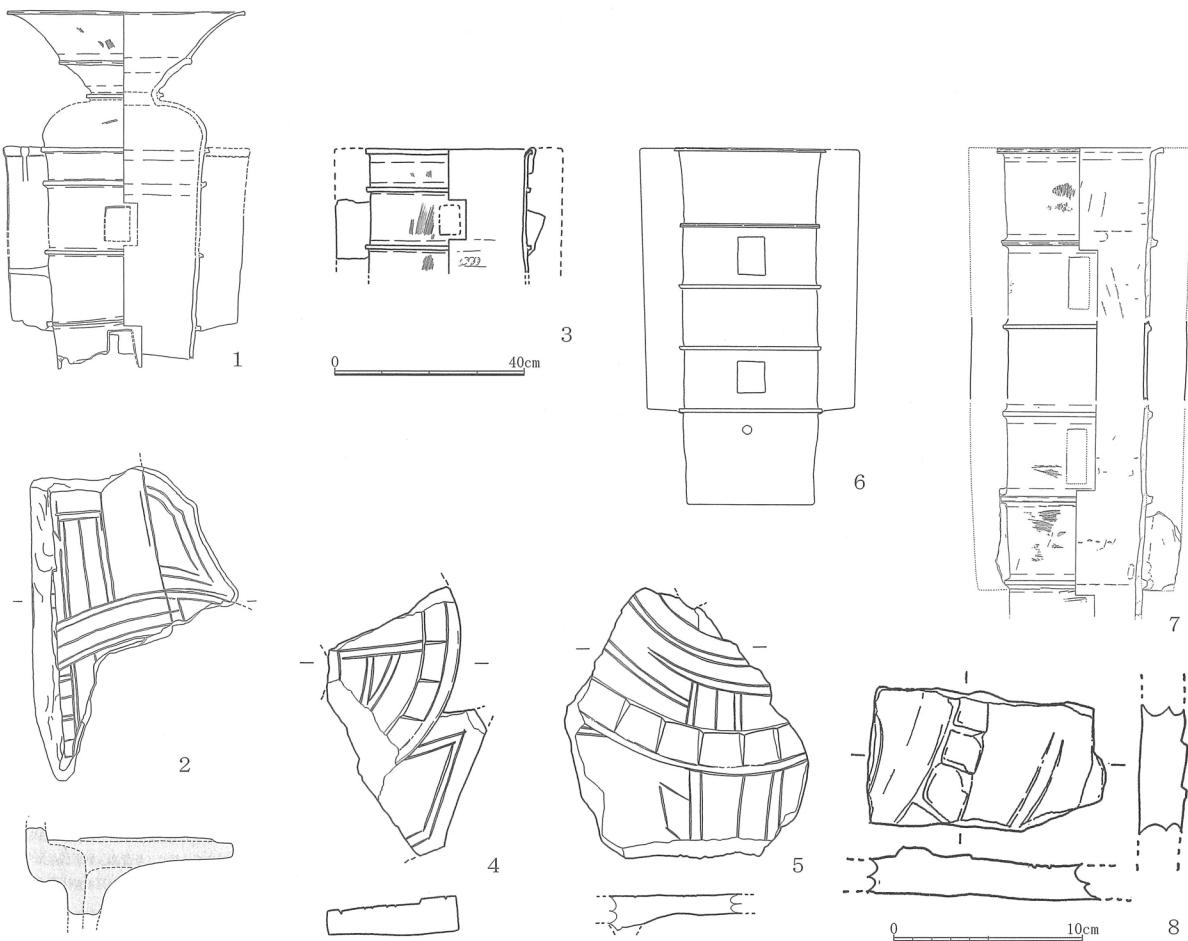
(2) 採集埴輪の位置づけ

ここでは上でまとめた当陵採集の埴輪の特徴などをもとにその位置づけを考えておきたい。

まず、円筒埴輪についてはその特徴から川西宏幸氏による編年案のⅡ期に位置づけることが可能である⁽⁹⁾。川西氏による円筒埴輪編年については、とくに古墳時代前期について細分化が進められているが⁽¹⁰⁾、それ以上の細かい位置づけができるような特徴を今回の採集資料からみいだすことはできない。ただし、現状ではヨコハケに静止痕を確認できることから、いわゆるB種ヨコハケは存在しないという理解も可能ではある。そうであるとすれば、廣瀬覚氏による編年案のⅡ期古相（Ⅱ-1もしくはⅡ-2期）に位置づけることも可能ではある⁽¹¹⁾。また、当陵の鰐付円筒埴輪は高橋克壽氏が指摘したいわゆる「斎一的な鰐付円筒埴輪」⁽¹²⁾に該当するといふことができるものの、廣瀬氏も指摘しているように、この「斎一的な鰐付円筒埴輪」を「大和北部勢力」の台頭と結びつける図式は適切とはいはず、注意が必要である⁽¹³⁾。

また、円筒埴輪の個別の特徴からみる他古墳出土資料との類似関係としては、第3図32のような非常に器壁の薄い鰐付円筒埴輪が奈良県内では景行天皇陵（渋谷向山古墳）、磐園陵墓参考地（築山古墳）、新沢500号墳などでみられることを指摘できる。また、外面調整のヨコハケや太めの突帯といった特徴が赤土山古墳出土の円筒埴輪の一部に類似している印象をうけるが、赤土山古墳では突帯設定の方法として方形刺突が卓越するようであり、当陵における様相とは異なっている。

次に形象埴輪についてみていくこととした。今回採集された形象埴輪のなかで注目される点は、鞍形埴輪が存在するということである。器財埴輪の編年をおこなった高橋克壽氏によれば、鞍形埴輪の出現は蓋形埴輪や盾形埴輪の出現よりも遅れることが指摘されており、そうであるならば高橋氏が指摘する前段階の古墳である奈良県日葉醉媛命陵（佐紀陵山古墳）、マエ塚古墳、櫛山古墳などに比べて当陵の埴輪群には後出する要素が含まれるということになる⁽¹⁴⁾。参考までにⅡ期の円筒埴輪に共伴する鞍形埴輪の事例をあげると、奈良県内では磐園陵墓参考地（築山古墳）、東大寺山古墳、新沢500号墳、佐味田宝塚古墳などがあり



1・2 東大寺山古墳 3～5 新沢500号墳 6 佐味田宝塚古墳 7・8 磐園陵墓参考地（築山古墳）

第9図 奈良県内出土の鞍形埴輪と関連資料 (1/16, 1/4)

(第9図)、鞍形埴輪が確認されていない日葉酢媛命陵(佐紀陵山古墳)などの先述した前段階の古墳と比較するといずれも円筒埴輪による検討からもおおよそ後出するとみなすことができるようである⁽¹⁵⁾。

また、笠部の段差表現が立体的な蓋形埴輪が存在するとすれば、蓋形埴輪のなかでも古相に位置づけることが可能である⁽¹⁶⁾。これについては立飾部の線刻表現が最古例である日葉酢媛命陵(佐紀陵山古墳)よりは崩れているとはいえ比較的古相をとどめていることとも整合する。現時点での資料のみから判断すれば、当陵の蓋形埴輪は日葉酢媛命陵のものよりも後出し、笠部が線刻表現となっている神功皇后陵(五社神古墳)のものよりも先行する可能性をもっているといえるが、いずれも資料数にかなり制限があることから断定することは難しい。

(3) 小結

ここでは、これまで述べてきた当陵採集埴輪の位置づけを簡単にまとめておきたい。

まず、円筒埴輪は川西氏による編年案のⅡ期⁽¹⁷⁾に該当し、いわゆるB種ヨコハケが存在しないとすれば廣瀬氏による細分のⅡ期古相(Ⅱ-1もしくはⅡ-2期)に位置づけることが可能である。また、形象埴輪では鞍形埴輪が確認されたことが重要であり、蓋形埴輪の笠部における立体表現や立飾部の線刻などとあわせて考えると、廣瀬氏による細分のⅡ期古相～新相(Ⅱ-2もしくはⅡ-3期)⁽¹⁸⁾に位置づけることが妥当と考える。

以上のような円筒埴輪の位置づけと形象埴輪の位置づけをあわせて考えると、廣瀬氏による編年案のⅡ-2期⁽¹⁹⁾に位置づけることも可能であるが、資料数も限られていて断片的な資料からの推測も含まれているので断定することは難しい。

おわりに

以上、当陵において採集された遺物について報告してきた。埴輪については、その位置づけは別にしても、これまでほとんど様相がわからなかった当陵の埴輪の実態をある程度は把握できるようになったことは重要である。また、落葉を送風機で除去しただけでこれだけの遺物が採集された点から判断すると、墳丘第1段は別にして、墳丘第2・3段については築造当時の状況を非常によく残しているものと思われる。

依然として全形のうかがえる資料がないことに変わりはなく隔靴搔痒の感は否めないが、今回報告した当陵の資料が今後の研究に少しでも寄与するところがあるとすれば幸いである。

註

(1) これまでの調査としては以下の報告がある。

陵墓調査室「垂仁天皇 菅原伏見東陵見張所改築工事箇所の調査」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。

陵墓調査室「垂仁天皇 菅原伏見東陵防災整備工事区域の立会調査」『書陵部紀要』第53号、宮内庁書陵部、2002年。

陵墓調査室「垂仁天皇 菅原伏見東陵樋門改修その他工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第56号、宮内庁書陵部、2005年。

これらの調査において出土した遺物のほかに、以下の書籍において紹介された遺物がある。

宮内庁書陵部『出土品展示目録 墓輪IV』2003年の(28)～(31)。

また、こうした出土遺物のほかに、嘉永年間におこなわれた盗掘の記録から埋葬施設が長持形石棺であったことが知られているほか、銅鏡の出土が伝えられている。

後藤秀穂『皇陵史稿』1913年。

著者不明「垂仁陵発掘の古鏡歎」『考古学雑誌』第2巻第4号、日本考古学会、1911年。

(2) 鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内I』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊、奈良市教育委員会、1997年。

(3) 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究—窯窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会、2003年。

(4) 註2と同じ。

(5) 辻川哲朗「円筒埴輪の突帯設定技法の復元—埴輪受容形態検討の基礎作業として—」『埴輪論叢』第1号、埴輪検討会、1999年。

(6) 各部名称については以下の文献によった。

笠野毅・福尾正彦「履中天皇百舌鳥耳原南陵の墳丘外形及び出土品」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。

(7) 市村慎太郎氏にご教示いただいた。

(8) 西光慎治「盾形埴輪の製作技法—黄金塚タイプの意義—」『黄金塚2号墳の研究』花大研究報告10、花園大学考古学研究室、1997年。

なお、同じものを指して「不退寺裏山タイプ」とする指摘もある。

河内一浩「棺に転用された盾形埴輪」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』伊達先生古稀記念論集刊行会、1997年。

(9) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号、日本考古学会、1978・79年。

(10) 鐘方正樹「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会、2003年。

廣瀬 覚「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会、2006年。

鐘方正樹「茨木市將軍山古墳・紫金山古墳の円筒埴輪」『埴輪論叢』第6号、埴輪検討会、2007年など。

(11) 廣瀬 覚「近畿における前期古墳の埴輪—西日本への展開を視野に—」『円筒埴輪の導入と画期』中国四国前方後円墳研究会第13回研究会、2010年。

なお、本稿では筆者の考える前期から中期にかけての埴輪編年と大枠で一致する廣瀬氏の編年案を採用する。

(12) 高橋克壽「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号、考古学研究会、1994年。

- (13) 註 11 に同じ。
- (14) 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第 71 卷第 2 号、史学研究会、1988 年。
- (15) 註 11 に同じ。
- (16) 註 14 に同じ。
- (17) 註 9 に同じ。
- (18) 註 11 に同じ。
- (19) 註 11 に同じ。

挿図・写真出典

第 1 図 陵墓地形図 L-48 をもとに筆者作成

第 2 ~ 8 図 筆者作成

第 9 図 1・2 : [『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館、2010 年] より転載、3~5 : 筆者作成 (原品は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵)、6 : [『佐味田宝塚古墳』河合町教育委員会、1986 年] より転載、7 : [『書陵部紀要』第 52 号] より転載・加筆、8 : [『書陵部紀要』第 49 号] より転載

写真 : 筆者撮影



垂仁天皇 菅原伏見東陵 採集品